

2016年9月20日



一橋大学体育会バレーボール部
第4回海外遠征（台湾）報告書
（ダイジェスト版）

文責 4年 主将 宇野宏祐

2年 栗本寛久

目次

I.概要	2
II.遠征総括①	4
III.遠征総括②	5
IV.日程詳細	7
V.部門別総括	14
(1)国立台湾大学との交流全般総括	14
(2)交流討論会総括	15
(3)ハイテク産業部門総括	16
(4)歴史文化部門総括	17
VI.如水会台湾支部夕食会	19
VII.参考資料	21
2016年度海外遠征計画書	22
収支報告	24
国立台湾大学・一橋大学 交流日程表（一橋用）	25
参加者名簿（一橋大学バレーボール部・国立台湾大学バレーボール部）	27
討論会プレゼンテーション資料①	31
討論会プレゼンテーション資料②	32

～はじめに～

私たち一橋大学体育会バレーボール部は、如水会、およびOBの皆さまのお力をお借りして、2016年8月2日から8月8日まで台湾にある国立台湾大学と交流試合をして参りました。バレーボール部にとって今回の海外遠征は4度目の試みでしたが、無事成功することができました。

頂きましたご支援・ご助力に対し御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。今回の海外遠征につき以下の通りご報告申し上げます。

I.概要

(1)日程〈8月2日～8月8日〉

- 8月2日 羽田発(CI221便)・台湾到着
- 8月3日 国立台湾大学バレーボール部との交流試合、如水会台湾支部夕食会
- 8月4日 国立台湾大学バレーボール部との交流試合・討論会・キャンパスツアー・交流夕食会
- 8月5日 台湾 Panasonic・MSI (Micro-Star International) 見学、交流協会台北支部訪問
- 8月6日 故宮博物院・国立台湾博物館・中正記念堂見学
- 8月7日 台湾高速鉄道で日帰りで台南へ、安平古堡・赤嵌楼見学・国立成功大学キャンパスツアー
- 8月8日 班別自由行動、松山空港発(CI222便)・日本へ帰国、解散

(2)参加者

体育会バレーボール部

現役部員	四年	5名
	三年	7名
	二年	5名
	一年	11名

付添OB 1名

計 29名

氏名一覧は添付の参考資料ご参照。

(補足) 海外遠征アドバイザー委員会から、麻植茂OB、吹野博志OBが、一橋大学バレーボールクラブ応援団として、安西正嗣OB、中島孝OBが国立台湾大学との交流(8月3日、4日)に参加。

(3)交流先

国立台湾大学（以下、NTU）Volleyball Team

(4)交流試合会場

国立台湾大学（No. 1, Section 4, Roosevelt Rd, Da'an District, Taipei City, 台湾 10617）
総合体育館および旧体育館（交流試合）、台大尊賢館 Just Italian（交流夕食会）

(5)宿泊場所

劍潭海外青年活動中心 8月2日～8月5日（3泊4日）

住所：No. 16, Section 4, Zhongshan N Rd, Shilin District, Taipei City, 台湾 111

ニューコンチネンタル・タイペイ 8月6日～8月8日（2泊3日）

住所：No. 73, Section 1, Chongqing North Road, Taipei, Taiwan

(6)その他、訪問先

台湾 Panasonic（新北市中和区員山路 579 号）

MSI（新北市中和区立德街 69 号）

交流協会台北支部（台北市慶城街 28 号通泰商業ビル 1 階）

Ⅱ.遠征総括①

3年 山浦拓

一橋大学バレーボール部の海外遠征はオーストラリア・中国・シンガポールに引き続き4回目となる。全ての遠征において如水会事務局および一橋大学バレーボールクラブ OBOG 会から多くの支援を戴き、回を追うごとに遠征の充実度は高まっている。本遠征では、初期準備段階で海外遠征の意義について部員で議論した。その結果として、今回は「海外遠征を経験した学生が、将来的に社会の第一線で活躍し、支援をしてくださった如水会や OBOG 会に恩返しをするとともに、まだ見ぬ後輩たちに、自分たち以上の経験をさせることができるきる人材を輩出する」という最終目標を掲げ、実行していった。今回の海外遠征において、それまでの遠征と比較し、特筆すべき点は、海外遠征アドバイザー委員会からの助言と勉強会を中心とした「部員主体」の遠征であったことである。

海外遠征アドバイザー委員会とは、麻植茂氏、吹野博志氏をはじめとする OBOG が委員となり、学生主導の海外遠征に、その経験から極めて有効な助言をする一橋バレーボールクラブの機関である。本遠征においては、実際に遠征を行う約1年4か月前の2015年4月に第一回アドバイザー委員会が開催され、その後も数回の委員会の中で、現役遠征担当の遠征計画に対し、助言を与えて戴いた。その結果として、遠征準備は深化し、遠征計画には磨きがかけられた。海外遠征アドバイザー委員会は「部員主体」を掲げた本遠征が独善に陥らないための重要な第三者機関であり、次回の遠征においてもそうあり続けると考えられる。

次に、勉強会を中心とした、「部員主体」の遠征についてである。本遠征では、遠征の3本柱である学生交流（特に交流討論会）、企業視察、文化学習についてそれぞれ独立した勉強会班を設置し、部員全員を各勉強会班に配属した。遠征準備の初期段階（2015年9月～2016年5月）においては、各班で企業や歴史・文化において事前調査をし、学生交流以外の遠征計画について自ら立案をし、遠征の中身を決定した。そして、遠征直前期（2016年6月～7月）には、毎週土曜日に各班主催の1時間から2時間にわたる勉強会を開催した。班ごとに学習した知識を部員全体に伝えるとともに、主催する勉強会班の班員が習得知識を発表することにより、自らの知識の深化を目的としたこの勉強会は、実際に台北歴史文化見学や台南歴史文化見学において、大いに成果を上げた。台南歴史文化見学では、国立成功大学歴史学系副教授の陳文松氏に案内役を務めて頂いたが、事前に学習した知識と陳先生の解説を照らし合わせ、史跡に対する理解を深めることが出来たことは、事前勉強会によるところが大きいと考えられる。討論会においても、事前勉強会の中で模擬討論会を行うことで、本番においても一橋側の学生が議論をリードすることが出来た。さらに、初めての遠征となる1・2年生を対象に、事前に、前回シンガポール遠征の様子に関して、写真を交えて説明することで、遠征の担当事務局から1・2年生まで、遠征に向けた意識を統一すること

が出来た。部員の 1/3 以上が、自発的に夏学期の一般教養科目「台湾の歴史と文化」を受講し、遠征に向けた自主的な事前学習を図ったことは、部員全体の遠征意識の向上の結果と言えるだろう。

遠征準備について述べてきたが、実際の遠征において印象的であったことは、国立台湾大学との交流であった。2 日間にわたる交流において、試合や討論会を重ねるごとに、非常に友好を深めることが出来た。最終日の班別自由行動において、国立台湾大学の学生とともに台北の市内見学を行った班があることは、画期的なことであった。来夏にも国立台湾大学を日本に誘致することを含め、海外遠征の目標である相互交流を本格的に進展させる上で、国立台湾大学との交流の成功は、一定の手ごたえのあるものであった。

前述の台南歴史文化見学において、現役の教授の方に、案内役をして戴いたことも、幸運であった。オランダ統治時代の史跡である安平古堡や赤嵌楼を、陳先生の解説によって見学することが出来たことは、単なる個人旅行とは異なる、海外遠征ならではの特典であった。

如水会台湾支部夕食会では、支部長の松木氏をはじめ、日本人如水会員の方や、台湾人の如水会会員の方々に歓待して戴いた。私は、最年長の馬さんのテーブルであったが、中国と台湾の関係性について、中国の思想を交えながら解説して戴き、中国の思想や歴史の学習の重要性を再認識した。海外遠征は、アジアの近隣国との友好関係の向上も目的であるが、日本がアジア諸国と連携していく中で、台湾と中国について学習することは不可欠に思われる。

上記の通り、今回は遠征準備段階に特に力を入れた遠征であったといえる。そして、準備に力を入れた分、現地で得られるものも非常に多かった。本遠征の経験を糧に、「海外遠征を経験した学生が、将来的に社会の第一線で活躍し、支援をしてくださった如水会や OBOG 会に恩返しをするとともに、まだ見ぬ後輩たちに、自分たち以上の経験をさせることができる人材を輩出する」という海外遠征の最終目標を達成したい。

Ⅲ.遠征総括②

文責 3年 裏田舜脩

一橋大学バレー部における海外遠征は、オーストラリア・中国・シンガポール、そして今回の台湾で第 4 回目となったが、この貴重な機会を無駄にすることのないよう部員が回を重ねるごとに反省と試行錯誤を繰り返していったため、本遠征は学生交流、歴史・文化視察、企業訪問といったあらゆる面でこれまでの遠征の中で最も有意義なものであったと確信している。

その一つが事前勉強会・討論会である。部員が受け身の姿勢で、かつ観光気分で海外に連れて行ってもらおうというのではなく、各々が積極的に学ぶ意欲を高めて欲しいとの思いか

ら、部員を歴史文化研究班・ハイテク産業班・討論会班に分け、大学の講義、OB 講演会、関連書籍等を利用しながら各分野の知識を深め、それを勉強会におけるプレゼンにより部員全員に共有させるという方式をとった。これが、企業や交流協会台北事務所訪問時に多くの質問の手が挙がった一因だと自分は考える。また、やはり前提知識を持っているか否かは実物を見た時の感動や理解度がまるで違う。本遠征は学生交流やキャンパス、博物館、歴史遺跡の視察が中心というアカデミックな要素の強いもので、日本人旅行客に人気である九份や台北 101 などの訪問は全体行程に組み込まなかったが、部員は一橋大学の学生だからこそできること、バレー部だからこそできることを体験し一層学びを深め、国際感覚を養うという最も重要な経験をできたと思う。

さらに、国立台湾大学との交流も大きな成果を上げることができた。前回の反省ではバレーボール部としてもっと試合を行う時間を増やしたいとの意見が多かったため、本遠征では試合を 2 日間行い、下級生にも出場機会が与えられえるように配慮した。実力は相手の方が格上であったが、拮抗した試合展開となるなどバレー技術向上の面において良い好敵手であった。

討論会では事前に英語勉強や討論テーマ研究を行っていた一橋大学側が取り仕切る形となったが、国立台湾大学側も真剣に討論に参加してくれていた。コミュニケーションはお互い英語のネイティブスピーカーではないため、思考しながらゆっくり丁寧に相手に伝えるという感じで話しやすかったように思う。夕食会も和やかな雰囲気でも多くの部員が連絡先を交換していた。

そして、最大の成果は監督をはじめとして国立台湾大学バレー部がチームとして日本に来る意欲を示してくれたことである。台湾は地理的にも近く、実現可能性は高いだろう。この海外遠征がきっかけとなり、一橋大学バレー部と国立台湾大学バレー部が末永く良好な関係を築けることを期待したい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった一橋大学バレー部 OBOG 会、如水会をはじめとする大勢の方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。そして、本遠征での経験を活かし、立派な社会人となってまだ見ぬ後輩たちに受けた恩を受け継ぐという形で恩返しさせていただきたいと思う。

IV.日程詳細

8/2（火曜日） 1日目

12時35分に羽田空港に集合し、日本時間14時35分発のチャイナエアライン221便で台北松山空港へ。台湾時間17時15分（日本時間18時15分、以後台湾時間表記とします）に台北松山空港に到着致します。旅行代理店に依頼した現地ガイドの方と合流、バスにて宿泊先の劍潭海外青年活動中心へ直行し、宿舎に到着。この日は、移動のみで終了。



8/3（水曜日） 2日目

2日目はMRT（地下鉄）にて、国立台湾大学へ移動。午前中は旧体育館にて国立台湾大学バレーボール部と交流試合。どちらもレギュラーメンバーで臨み、接戦の末、一橋大学が敗北。午後は新体育館に移動し、両チーム合同で昼食をとり、午後にも交流試合を行った。午後は新人中心での対戦であったが、ここでも一橋大学が完敗。しかし、試合後は国立台湾大学から飲み物を御馳走して頂くなど、交流を深めることが出来た。試合後は、MRTにて如水会台湾支部夕食会会場の海霸王中山店へ移動。如水会台湾支部夕食会では、支部長の松木氏をはじめ、台籍の如水会員の方も参加され、日台関係や台湾における日本の事業展開についてなどのお話を伺う。バレーボール部側からも吹野博志OBによ

る一橋大学のグローバル教育に関する現状報告や部員の決意表明など、相互に発信し、学生にとって非常に有意義な夕食会となった。



8/4（木曜日） 3日目

3日目も MRT にて国立台湾大学へ移動。午前は交流試合にて、前日同様スポーツ交流を行った。午後は合同で昼食をとり、交流討論会を行った。テーマは「日台関係の今後」と「人工知能との共生」について、5班に分かれ英語によって討論を重ねた。日台両国間の観光業を中心とした経済交流や、人工知能と共に働く未来について有意義な結論をまとめることが出来た。その後は、国立台湾大学バレーボール部員によるキャンパスツアーをして頂く。校史館にて、台北帝国大学時代からの国立台湾大学の歴史を学ぶことや、図書館などを案内して頂いた。国立台湾大学のキャンパスは、中心を走るヤシの木が植えられた一本道が印象的であるが、建築物においては一橋大学と近似している部分もみられ、日本統治時代の名残と、台湾独自の気候に沿った自然の両面を認識することが出来た。その後は、国立台湾大学に近接した夕食会会場にて交流夕食会を開催。討論会ではできなかったプライベートな話から、将来のビジョンなどを語り合うなど、両校の友好を深めるとともに、来夏の訪日の意思を確認し、今後に繋がる夕食会となった。



8/5（金曜日） 4日目

4日目は、台湾で直接手配したバスにて宿舍を出発。如水会台湾支部支部長の松木氏のお勤め先である台湾 Panasonic に企業見学をさせて頂いた。台湾大学側からも、3名が参加し、同じグループとしてレクチャーを受けた。台湾 Panasonic では、林総経理のお話や、企業説明、ショールーム見学、冷蔵庫の製造ラインなど、充実したプログラムで学ぶことが出来た。IoT という世界的な潮流を意識した台湾 Panasonic のレクチャーは、ハイテク産業班が学習した内容と合致する部分があり、事前学習の効果についても再確認した。午後は純台湾企業である MSI に訪問した。入れ替わりの激しい業界の中で生き残る経営手法や、現在力を入れているゲームや高速バスなどでのモニター技術など、最先端の技術に触れることが出来た。MSI の次は実質の大使館にあたる交流協会台北支部に訪問をさせて頂いた。交流協会では沼田代表のご講話を拝聴し、台湾と日本の歴史的関係や、力強い激励のお言葉を頂いた。質疑応答も活発なものとなり、部員一同で事前の歴史学習での疑問を解消することが出来た。4日目の公式行程は終了し、18時頃に宿舍に戻った。夕食は班別の自由行動としたが、多くの者が宿舍近隣の士林夜市へ夕食を取りに行った。





8/6（土曜日） 5日目

5日目は、歴史学習ツアーへ参加した。午前中は故宮博物院にて、明清時代からの歴史的・考古学的価値のある芸術品の数々を見学した。一つ一つの芸術品もさながら、中国史を体系的に学ぶエリアでは、大学受験時に学習した歴史との比較など、各々が目的をもって学習に取り組んだ。故宮博物院の次は、国立台湾博物館へと移動した。国立台湾博物館は、日本統治時代に建設された建築物であり、建物内の原住民や生態系についての展示もさながら、その建築美は目を見張るものがあった。隣接する2.28記念公園も見学することができ、日本統治時代から中国国民党時代に至るまでの歴史的建造物に触れることが出来た。最後は蒋介石を記念した中正記念堂の見学をした。中正記念堂では、蒋介石の人物史や中国国民党政権時代の体制について多くの写真などにより視覚的に理解することが出来た。実際に台湾に赴き、台湾の歴史文化を学ぶにつれて、台湾は想像以上に中華民国であり、その文化的な特徴から中華人民共和国とは差別化された正統なる中国を自認していることを感じた者が少なくない。



8/7（日曜日） 6日目

6日目は、台湾高速鉄道を利用し、台湾南部の港町である台南に訪れた。事前に連絡を取っていた国立成功大学副教授の陳文松教授と合流し、手配バスにてオランダ統治時代の拠点である安平古堡の見学を行った。安平古堡は、台北に残る建築様式とは大きく異なる、西洋的な建築物であった。安平古堡内部には資料館もあり、オランダ統治時代の統治体制や兵士の像など、一般に語られる初期台湾史の実像に触れた。次は、陳先生のご案内で国立成功大学のキャンパスツアーへと移動した。国立成功大学も、国立台湾大学と同様に日本統治時代にその前身を持ち、校内の様子などは、多少の南国的な自然もありながら国立台湾大学、ひいては一橋大学に似ている印象を受けた。国立成功大学の次は、ここもオランダ統治時代の拠点である赤嵌楼を訪れた。赤嵌楼は、安平古堡とは違い、東洋的な城塞を持ち、日本の城を想起させるような外観であった。ここも、内部には資料があり、オランダによる台南の地理的な情報について詳細に記述されていた。台南は、台北とは、気候・建築様式・人々の性格も異なるところがあった。陳先生の学術的な解説もさながら、台湾に存在する多様性を肌で感じるということが出来たということがこの日の収穫であろう。また、台湾高速鉄道に関していえば、日本の7企業連合が技術輸出によって開発したものであり、車内の内装は日本の新幹線を錯覚させるほどに酷似していた。異文化に触れ

てきたここまでの日程であったが、台湾高速鉄道を通じて、日本のインフラストラクチャー輸出について、海外における日本の存在について認識を深めることが出来た。



8/8（月曜日） 7日目

7日目は、班別の自由行動とした。全体日程の偏りを是正するために前回のシンガポール遠征から導入した班別自由行動であるが、今回も事前に班長からの計画提出を遠征担当が管理した上で、5つの班に分かれて半日程度行動した。詳細は、各班の報告書を参照して頂きたい。

V.部門別総括

(1)国立台湾大学との交流全般総括

文責 4年 栗野一輝

国立台湾大学は、旧帝国大学を前身としており、台湾内でトップレベルの大学である。今回の台湾遠征の中で、国立台湾大学との交流は中核をなす部分である。前回のシンガポール国立大学との交流を経て、もっと交流試合の時間を増やしたい、交流討論会の密度を濃いものにしたい、という反省をもとに、7日間の日程のうち、ほぼ丸二日を台湾大学との交流に充てている。

交流内容を大分すると、(1)親善試合・(2)交流討論会・(3)キャンパスツアー・(4)交流夕食会の4つに分けられる。それぞれの詳細は該当報告に譲るとして、全体の流れを概観しつつ、台湾大学はどのようなカルチャーを持っていたかについて話したい。

はじめに、国立台湾大学男子バレーボール部は創部20年ほどで、つい数年前から「体育学生」を募集し、最近では台湾大学リーグで1部3位の成績を取っていたこともある強豪チームであった。台湾では、日本のような中高の部活はなく、一般学生と体育学生に分かれてそれぞれの分野で成績を残していくようだ。台湾大学では体育学生の推薦入学が行われているが、あくまで入学のきっかけであり、一般学生と同じように各学部（いわゆるスポーツ学部のようなものはまだ学部にはないようである）に振り分けられ、同じようにカリキュラムを修業しなければならない。したがって中には単位数が足りず留年する者もいるようだ。練習は週二日で、学部生は必ず毎回参加、院生は任意参加である。日本では、学部と院の隔たりが大きく、学部生は大学院の実情を気軽に聞ける場が少ないと感じる。学部生と院生が同じ部活に所属し、練習を共にするという日本には殆どない珍しいスタイルは魅力的に映った。

交流討論会および交流夕食会を通じて、院生は学力も英語力も圧倒していたと感じたが、学部生は自分たちと同じくらいの英語力か、少し国立台湾大学側の方が高いくらいであったと感じた。今回は前回と異なり、非英語ネイティブ同士の交流ということで、お互い分からないことがあったら漢字を使ったり、身振り手振りでコミュニケーションをとっていた。

国立台湾大学が一橋大学をはじめ日本の大学と異なっていると感じた部分は、学問と生活とが一体となったキャンパスライフを提供していることだと思う。日本は学生数の割に敷地面積がとれないということもあるが、教室や図書館で勉強した後、テーマパークにあるような売店で飲み物を買うのもよし、大きな池のほとりで魚や鳥を観察するのもよしで、職住隣接ならぬ学住隣接のキャンパスづくりを目指しているように感じた。その点、

台湾も欧米の大学のように、日本も参考にすべきであると思う。

また、台湾大学の学生は非常に親日的で、日本に来たことがある学生は複数人おり、来年から日本の大学へ留学する学生もいた。よく台湾は親日的と言われることがあるが、実際に国立台湾大学の学生という、非常に学力が高い若い世代の人々も、日本に興味を持っていてくれることを実際に体感した。それはありがたいことであり、自分たちや彼らが社会で活躍する年代になったときにその関係をさらに発展させるためにも、今回できた関係を継続するようにしたい。

(2)交流討論会総括

文責 3年 宮口佑太

前回のシンガポール遠征に続き、今回の台湾遠征でも英語での討論会を行うこととなった。それに際して、討論会の準備や当日の進行を行う「討論会班」が結成された。討論会班では、まず前回のシンガポール遠征に参加した3・4年生のメンバーを中心に、前回の討論会の反省点を挙げることから始めた。挙げた反省として、①プレゼン・進行に携わっていない部員が内容を知らず、当日行き当たりばったりで討論をせざるを得なかったこと、②そもそも英語の準備が不十分であったこと、の2点が主に挙げられた。

その後、これらの反省点を踏まえ、7/2（土）・7/30（土）の2回行われた事前勉強会のための準備を進めた。1回目の勉強会の前には、先述した①を踏まえ、勉強会班員が各々本や新聞などから得た知識などを班内で事前に共有・整理した。勉強会当日では日本語で各テーマ（日台関係、AI）について自由に討論する際、各グループの討論会班員がこれらの知識を利用して議論をリードしていくなど、部員全員が十分な基礎知識をつけられるよう工夫した。2回目の勉強会では、実際に英語で討論を行った。討論会班では、先述した②を踏まえて、議論の最中に使えるフレーズ集・各テーマに即した用語集・議論の流れを想定した英文例集などを用意し、英語に課題のある部員一同の一助になるよう努めた。

当日の様子については、1年旭が討論会本番について記述するためここでは割愛し、以下で私の感じた成果と反省について述べる。まず成果としては、前回の討論会に比べ、部員の発言が格段に増えたことが挙げられる。討論会班が準備した資料や勉強会の内容を踏まえた、各グループでの話し合いが事前に行われ、当日も詰まる部分がありはしたが活発に意見を伝える姿が見えたと感じている。一方で、まだ相手に圧倒される場面もあったため、英語能力の底上げが必要だと感じた。これについては部員一同、自らの英語の至らなさを痛感しているため、これを機に次回の遠征での討論会に向け英語学習を継続させていく土壌を作ることが、先を見据えた討論会班としての課題ではないかと思う。また私個人の反省として、班員への割り振りがうまくいかなかったことが挙げられる。班長の私が多くを自分で担当したことで、班員内での共有がうまくいかなかった部分があった。ここがうまくいけばより

円滑に進められたため、早め早めに計画・行動すべきだった。

私自身、シンガポール・台湾での2度の討論会を経て、やはり世界のトップレベルの大学の学生と討論を行うことは、かなりの良い刺激になると感じている。このような機会への多大なご支援をいただいている如水会や OBOG 会の皆様への感謝と、「一橋生としての確固たる矜持」を持って堂々と討論会に参加できるような入念な準備を後輩たちに期待して、総括としたい。

(3)ハイテク産業部門総括

文責 3年 竹内誠也

今回の遠征においてハイテク産業について学べたことは、大学で学んでいることやニュースで耳にすることを実体験でとらえることができる素晴らしい機会であったと思う。ハイテク産業が台湾で盛んであると耳にするが実際どうであるかを自分たち自身の目で見ることができた。

まず企業訪問をするにあたって事前に勉強会を行った。事前の勉強会では、①ハイテク産業とは何か。②ハイテク産業は日本と台湾においてどのように変化し、現状はどうなっているか。③訪問する Panasonic 台湾、msi はどのような企業でハイテク産業全体ではどのような立ち位置か。の3つの点をハイテク産業班が分担して調べ、全体に発表した。

ハイテク産業とは何か。においては、自分たちにとって身近な存在であるバレーボールにおいても、世界バレーではチャレンジシステムが近年導入され、コンピューターが審判のジャッジの手助けをしているという観点から始まって、ハイテク産業とはコンピューターやバイオテクノロジーなどの先端技術を中心とした産業であることや、よく混同される IT 産業との違い、ハイテク産業が生まれた経緯を学んだ。

ハイテク産業が日本と台湾においてどのように変化し、現状はどうなっているか、については日本では1990年代からゲームの開発が盛んになり、ハイテク産業発展の絶頂期になっていたが、現在では成長の速度が遅くなり、衰退し始めている一方で、台湾では1990年代から政府がハイテク産業発展のための支援を行い、近年では世界トップクラスのハイテク産業となる急成長をしているということを学んだ。

訪問する Panasonic 台湾、msi はどのような企業で、ハイテク産業全体ではどのような立ち位置あるか、については両社の設立や時期や会社規模、作っている製品などについて学び、Panasonic 台湾は台湾において家電販売売上の30%近くを占めており、msi はマザーボードを作っている世界の三大会社の1つであることを学んだ。この両社についての勉強は企業訪問に特に直結した内容となった。実際の企業訪問では、Panasonic 台湾ではハイテク産業の中心である IC の製造工程を見せていただき、なかなか得られることのできない機会となった。msi では、かつてパソコンにおけるゲームはデスクトップパソコンでなくては容量が足りなかったが、近年はノートパソコンでも実現できるようになったという説明

を受け、実際にそのパソコンを見せていただき、その他にも最新のナビシステムなどを実際に体験させていただいた。

これらの企業訪問はこれから就活を控える3年生以下にとっては、ハイテク産業はどのような業種で、就職するにはどのような能力が必要であるかということ学ぶ機会となり、春から社会人となる4年生にとっても、企業で取引していく中で、現状がどうなっているのかを学ぶいい機会となった。

このような機会を設けて下さった如水会台湾支部の松木さんと見学に応じていただき僕たちの質問にも快く答えて下さった Panasonic 台湾と msi の皆さんに感謝したい。

(4)歴史文化部門総括

文責 2年 住吉瑞基

今回の海外遠征では、主に国立台湾大学の学生との交流、台湾のハイテク最先端技術視察、台湾の歴史と文化学習の三点を学ぶべき柱として掲げてきた。その中でも台湾の歴史と文化を学んで臨むのには大変大きな意味を有していたと思う。なぜならその学習が台湾の政治的背景、経済状況、国民的意識などの理解に直接的に繋がるためである。

海外遠征前の事前勉強会では、台湾の歴史と文化の学習を歴史文化の班員が先導して行った。台湾の統治者などから時代を四分割して、プレゼンテーションを実施した。(区分は以下の通り。1.オランダ・鄭氏統治時代、2.清朝統治時代、3.日本統治時代、4.中国国民党統治時代から現代まで)

まずは一つ目のオランダ・鄭氏統治時代について。遠征で関連していたのは、六日目の安平古堡と赤嵌楼を訪れた台南見学だ。安平古堡は堅固な防衛城として実に見事な建築であった。歴史ある城壁や大砲の跡が見られたほか、積み上げられたレンガの群からは西洋的建築の特徴も色濃く感じられた。赤嵌楼でも城砦跡や記念碑が歴史を感じさせ、城内の水路跡からは水源確保の術が伺えた。そして両者に共通していた点が、台湾の人々が鄭成功を英雄として祀り、その遺品や偉業を丁寧に紹介していたことだ。

次に二つ目の清朝統治時代について。これには五日目に訪れた故宮博物院が関連する。故宮博物院では、中国の石器時代の陶器や明清時代の皇帝の遺品など幅広い歴史的遺産が展示されていた。事前勉強会では、故宮博物院に中国の遺品が多く残されていることの経緯と博物院の詳細について学習してきた。見学当日はガイドの謝さんの丁寧なご説明もあり、古代中国からの流れや清朝期の皇帝の愛用品に渡るまで多くの実物を目にする事が出来た。勉強会で事前に紹介されていたものもあり、非常に有意義な見学となった。

そして三つ目の日本統治時代については、五日目の国立台湾博物館が関係する。ここは元台湾総督の児玉源太郎や民政局長を務めた後藤新平を記念した歴史ある博物館で、台湾の原住民文化や台湾特有の自然についても説明がなされていた。特に外観の西洋ルネッサ

ンス様式の建築は勉強会で学んでいたところであり、その荘厳な佇まいは圧巻であった。またあまり学習する機会がなかった原住民文化の学習もでき、非常に良い機会になった。

最後に四つ目の中国国民党時代についてだが、ここも五日目に訪れた中世記念堂が関連する。ここは中華民国初代総統の蒋介石の記念堂であり、その遺品や巨像などを見学し、現地の台湾の人が蒋介石という人物を偉大な指導者と評価する姿勢を強く感じられた。また勉強会で挙げていた衛兵の交代式も見学することができ、実りのある学習になった。

こうした場所を回り、台湾の歴史と文化の理解を深められた。特に日本での学習と現地で感じた台湾人の歴史観とのギャップが新たな理解に繋がったと強く感じる。こうした経験はやはり日本での学習だけでは成し得ないことであるため、今回の遠征での見学は、自分たちの歴史観を問い直すという意味でも非常に貴重な機会になったと思う。

VI.如水会台湾支部夕食会

文責 3年 小林稔啓

【日時】8月3日(水) 18:30~20:30

【場所】レストラン海霸王中山店

【概要】

如水会台湾支部による歓迎会は、4つの円卓に着席し、それぞれのテーブルをバレー部員7名、OB1名、如水会台湾支部の方2名ずつで囲みお話を聞くという形式であった。

まず、如水会台湾支部長の馬紹祥さん(昭和45年卒。台籍支部長)、松木洋さん(昭和60年卒。日籍支部長)からそれぞれご挨拶をいただいた。如水会台湾支部の支部会員は256名で、うち237名は台籍、19名は日籍であり、活動会員の増加に取り組んでいるとのことだった。

次に、朱戸平さん(平成5年帰国)から『台湾と日本のキズナ』というタイトルでプレゼンテーションをしていただいた。台湾が日本の植民地時代である時代に、嘉義農林学校が甲子園に出場するなど、日本が一方的に統治していたわけではないことを教えていただいた。一方で、台湾で生まれた日本人の湾生帰郷の問題もあり負の部分も確かに存在するということだった。経済関係においては、積極的な貿易を行っており重要な商業パートナーであるというお話だった。東日本大震災の際にも台湾の人々は被災地に対して多額の義援金を贈るなど、友好関係が伺うことができた。

我々のテーブルでは、安本祐さん(平成19年卒)と長島由典さん(平成18年卒)から台湾のマナーや台湾でのお仕事などの話をしていただいた。特に長島さんは台湾の鉄道関係の仕事に携わっているようでとても興味深いお話だった。夕食会も終わりが近づき、まず一橋大学の校歌を全員で歌った。続いて、如水会台湾支部の方々、バレーボール部OBの方々、現役の各学年の代表が前に出て一言ずつお話をいただいた。バレーボール部OBの吹野博志さん(昭和42年卒)からは、一橋大学の現状についてグローバル人材育成に向けた取り組みに関するお話があり、私自身も機会をいただき3年生代表として今後のバレーボール部についてのお話をさせていただいた。

最後は記念撮影を行い、夕食会は終了した。

【感想】

如水会台湾支部の方にこのような会を開いていただき大変貴重な機会となりました。特に、一橋大学の卒業生が世界で活躍していることを直に感じ



ることができましたし、如水会のネットワークの強さも感じました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

VII. 參考資料

2016年5月30日

2016年度海外遠征計画書

一橋大学体育会バレーボール部

1. これまでの海外遠征

2010年度 豪州、2012年度 中国、2014年度 シンガポールに遠征。

2016年度 台湾に遠征を計画

2. 海外遠征の目的

近年、ハイテク産業を軸に急成長を遂げる台湾を訪れ、現地の学生と親善試合や討論会を行うことにより相互交流することで、国際的視野を広げ、国際人としての知見を得ることを目的とする。また、大学体育会運動部の一員として台湾を訪問することにより、単なる個人的な海外旅行では経験できない事柄（政府機関や先端産業等を視察すること）を実際に体験する。更にはバレーボールという共通基盤を通じ他国学生と交流を深めることで部としての活動の充実を図ることを目的とする。

3. 海外遠征参加者

- ・引率 OB 1名
- ・新4年生 5名
- ・新3年生 7名
- ・新2年生 6名
- ・新1年生 11名

= 合計 29名

氏名等の詳細は添付別紙の通り。

4. 交流先

国立台湾大学 (National Taiwan University =NTU)

バレーボールチーム

5. 宿泊先

台北劍潭青少年宿舎 (8月2日～5日 3泊4日)

(No. 16, Section 4, Zhongshan N Rd, Shilin District, Taipei City, 台湾 111)

ニューコンチネンタル・タイペイ (8月6日～8日 2泊3日)

(No. 73, Section 1, Chongqing North Road, Taipei, Taiwan)

6. 実施年月日

2016年8月2日～8月8日 現地6泊7日を予定。

7.日程案・タイムテーブル

1日目 (8月2日 火曜)

- 11:00 羽田空港集合
- 14:15 羽田空港出発
- 17:15 台北・松山空港
- NT 台北劍潭青少年宿舎到着

2日目 (8月3日 水曜)

- AM NTU バレーボールチームと交流試合
- PM NTU バレーボールチームと交流試合
- NT 如水会台湾支部夕食懇親会

3日目 (8月4日 木曜)

- AM NTU バレーボールチームと交流試合
- PM NTU バレーボールチームと交流討論会
- NT NTU バレーボールチームと懇親夕食会

4日目 (8月5日 金曜)

- AM 台湾 Panasonic 工場視察
- PM MSI 工場視察
- NT 交流協会台湾支部訪問

5日目 (8月6日 土曜)

- AM 故宮博物院見学
- PM 国立台湾博物館見学・総統府外観視察
- NT その他、台北市内の文化遺産（未定）を見学

6日目 (8月7日 日曜)

- AM 台湾新幹線により台南へ移動
- PM 台南市内・安平古堡・国立台南博物館視察
- NT 台湾新幹線により台北へ移動

7日目 (8月8日 月曜)

- AM 班別自由行動
- PM 同上
- 16:00 ホテル集合後、全体で台北松山空港へ
- 18:15 台北・松山空港発
- 21:55 羽田空港着
- 解散

以上

収支報告

一橋大学バレーボール部第四回海外遠征(台湾)収支
報告書

平成 28 年 9 月 19 日

会計担当: 裏田

* 1: 現地での NTD 換算率: 0.3034

【収入の部】					
	項目	単価 (円)	数	金額 (円)	備考
1	OBOG 会支援金			1,000,000	
2	如水会国際交流助成金			1,000,000	金額は未確定(OBOG 会が立替)
3	参加者個人負担金(付添 OB を含む)	50,000	29	1,450,000	
	収入合計			3,450,000	
【支出の部】					
	項目	単価 (円)	数	金額 (円)	備考
1	飛行機代・宿泊費等			2,735,309	
2	海外旅行保険費用	2,440	29	70,760	
3	現地交通費			350,869	
4	台湾大学との交流会費用			98,156	
5	現地訪問親善交歓品費用			59,446	
6	その他雑費(携帯電話レンタル費等)			76,704	
	支出合計			3,391,244	
	収支(次回への繰越金)			58,756	

国立台湾大学・一橋大学 交流日程表（一橋用）

文責 比屋根亮太・山浦拓

8/3（水）			8/4（木）			8/5（金）
時間	内容	場所	時間	内容	場所	場所
0900-0930	到着	Gym 1F	0900-0930	到着	Gym 1F	台湾 Panasonic・ MSI・交流 協会台北支 部訪問
0930-1000	アップ		0930-1000	アップ		
1000-1010	開会式		1000-1130	第三試合		
1020-1045	アップ（続）		1130-1200	シャワー		
1045-1200	第一試合		1200-1300	昼食	NTU Sports Center 2F 247 room	
1200-1400	昼食	NTU Sports Center 2F 247 room	1300-1400	キャンパスツアー	NTU Campus	
1400-1430	アップ	Gym 1F	1400-1430	イントロダクション	NTU Sports Center 2F 248 room	
1430-1630	第二試合		1430-1600	交流討論会	247 & 248 room	
1630-1700	シャワー		1730-2000	交流夕食会	捷絲旅 2F 義響食堂	

交流の主なタイムスケジュールは以上の通りです。
以下、試合や討論会について補足説明いたします。

・ 試合について（8月3日、4日）

第一試合～第三試合まで5セットマッチの試合

第一試合、第三試合はレギュラーメンバー、第二試合は新人（1・2年生中心）

・ 討論会について（8月4日 14:00～16:00）

14:00～14:30 自己紹介・イントロダクション

- 14 : 30～14 : 45 全体に対して一橋側が議題の内容について説明
- 14 : 45～15 : 15 各班で討論 (5 班のうち 3 班は台日連携、2 班は AI について)
- 15 : 15～15 : 30 各班で討論結果発表 (3 分×5 班)
- 15 : 30～16 : 00 発表に対しての意見や質問を全体で話し合う。

・ 討論会テーマ

① アジア情勢 : 5 班のうち 3 班がこれについて討議

- (1) 台湾と日本が今後どのように連携していくか : 日本から台湾・台湾からの日本の印象などの意見交換をし、歴史を見つつ、今後、経済・政治・文化の面でどのように連携していく
- (2) 中国と台湾の関係について : 政権交代後、中国と台湾の関係性はどのように変化していくのか、そこに日本が関連していくことはできるか

② AI について : 5 班のうち 2 班がこれについて討議

AI が社会に進出する中で、人間と AI は共存することが出来るのか。いかに共存していくか (分業していくか)。

・ 交流会場 (体育館) へのアクセス

MRT 公館駅から徒歩 10 分です。以下、キャンパスマップ  の体育館 (総合体育館ではないのでご注意ください)

画像が細かく、見にくい場合は下記のリンクをご参照ください。

http://www.ntu.edu.tw/english/about/map/B_02_A.jpg

参加者名簿（一橋大学バレーボール部・国立台湾大学バレーボール部）

	学年	学部	氏名	読み仮名	年齢	
1	4年	経済	宇野 宏祐 (主将)	ウノ コウスケ	23	
2	4年	法	栗野 一輝 (主務)	アワノ カズキ	22	
3	4年	法	岡田 健吾	オカダ ケンゴ	22	
4	4年	法	長尾 知樹	ナガオ トモキ	21	
5	4年	社会	和田 幸菜 (マネ)	ワダ ユキナ	21	
6	3年	商	宮口 佑太	ミヤグチ ユウタ	21	
7	3年	経済	酒井 響	サカイ ヒビキ	22	
8	3年	経済	竹内 誠也	タケウチ マサヤ	21	
9	3年	法	小林 稔啓 (副将)	コバヤシ トシア キ	21	
10	3年	社会	裏田 舜脩	ウラタ シュンス ケ	21	
11	3年	社会	山浦 拓 (遠 征リーダー)	ヤマウラ タク	20	
12	3年	商	辻 佳奈子 (マネ)	ツジ カナコ	21	
13	2年	商	相川 泰輝	アイカワ タイキ	20	
14	2年	経済	佐々木 拓海	ササキ タクミ	20	
15	2年	法	平林 凜太郎	ヒラバヤシ リン タロウ	19	
16	2年	社会	栗本 寛久	クリモト ヒロヒ サ	21	
17	2年	社会	住吉 瑞基	スミヨシ ミヅキ	19	
18	1年	商	渡邊 雄貴	ワタナベ ユウキ	18	
19	1年	経済	阪口 雄基	サカグチ ユウキ	19	
20	1年	経済	吉田 大介	ヨシダ ダイスケ	18	
21	1年	法	今井 優貴	イマイ ユウキ	18	
22	1年	法	吉田 陽	ヨシダ アキラ	19	
23	1年	社会	石田 龍	イシダ リョウ	18	

24	1年	社会	笠原 凜太郎	カサハラ リンタ ロウ	19	
25	1年	社会	比氣 朋訓	ヒキ トモノリ	19	
26	1年	社会	渡部 龍生	ワタナベ リュウ セイ	19	
27	1年	商	旭 麻衣 (マ ネ)	アサヒ マイ	19	
28	1年	商	山田 真由 (マネ)	ヤマダ マユ	18	
29	付添 OB	一橋バ レーボ ールク ラブ	宗田 雅彦	ソウダ マサヒコ	64	◎

Name	English name	Major	Grade	Height	Position	Number
李則穎 (captain)	Tse-Ying Lee	Department of Medicine	2	174	S	5
林炫宇	Hsuan-Yu Lin	Department of Agronomy	3	175	S	7
蔡政儒	Chang-Ju Tsai	Graduate Institute of Mechanical Engineering	1	180	S	20
黃柏勳	Bo-Shiun Huang	Graduate Institute of Applied Mechanics	8	173	S	14
陳昭銘	Chai-Ming Chen	Department of Bio-industrial Mechatronics Engineering	2	189	WS	18
蔡佳昇	Chia-Sheng Tsai	Department of Anthropology	3	184	WS	10
郭佑澤	Yo-Tse Kuo	Department of Agronomy	3	175	WS	4
林柏均	Po-Chun Lin	Assistant Manager of Department of Agronomy		181	WS	9
呂紹瑀	Shao-Yu Lu	Department of Civil Engineering	1	180	WS	12
洪紹鈞	Shao-Chun Hung	Department of Electrical Engineering	2	187	MB	13

呂姜耀凱	Yao-Kai Lu- Chiang	Department of Civil Engineering	4	194	MB	2
陳昱嘉	Yu-Chia Chen	Graduate Institute of Applied Physics	1	182	MB	11
殷豪	Hao Yen	Department of Information Management	3	180	MB	1
張智傑	Chih- Chieh Chang	Graduate Institute of Linguistics	4	180	WS	6
史瀚陽	Han- Yang Shih	Graduate Institute of Library and Information Science	2	175	WS	16
曹仲偉	Chung- Wei Tsao	Department of Agronomy	1	175	WS	8
比屋根亮 太	Ryota Hiyane	Graduate Institute of politics	6	174	L	19
李楚翹	Chi- Chiao Lee	Graduate Institute of Linguistics	1	185	L	3

副教授	胡林煥	Lin Huan Hu	国立台湾大学体 育室
-----	-----	-------------	---------------

討論会プレゼンテーション資料①

Theme 1 Japan-Taiwan relations

Basic Stance of Japan toward Taiwan

- Japan does not accept Taiwan as an official country
- Japan-Taiwan relations are substantially the same as those between official countries

Active Exchange of People and Culture

Contents	Year	
Taiwan→Japan The Number of Visitors	2015	3,677,075 (Year-on-year 29.9%)
Japan→Taiwan The Number of Visitors	2015	1,629,193
The number of students from Taiwan	2015	7,314 (Year-on-year 17.4%)

Foundation of good public opinion
→Japan and Taiwan are basically in close and good relations

Important Economic Partner

- Japan is the second largest trading partner for Taiwan
- Taiwan is the fifth largest trading partner for Japan
- Total direct investment to Taiwan
→ About 200 million dollars
- Total direct investment to Japan
→ About 164 million dollars
- export the products of their own strong fields, such as electrical equipment, to each other

Taiwanese Domestic Politics

- Regime change from Nationalist Party to Democratic Progressive Party
- The new administration has set up a Japan-US-oriented policy
→Growing expectations for closer Japan-Taiwan relationships

Democratic Progressive Party		Nationalist Party
Taiwan is one of the independent countries	Basic Stance of Taiwan	Taiwan is part of China →Opposition to Taiwan Independence
Willingness of mutual cooperation	Relations with China	Aim to foster a mutual trust

Question

- Should Japan and Taiwan cooperate in their field of strength, high-tech industry, to develop new technology?
- What can we do to make the tourism industry become an even more important source of income for the country?
- What do we need to build better relation?

Reference

- http://ao-taiwan.net/phocadownload/2015_statistics_by_month.pdf
- [https://www.koryu.or.jp/e23_contents.nsf/15ae977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547aff49257b160022a9c3/\\$FILE/2015datatabook.pdf](https://www.koryu.or.jp/e23_contents.nsf/15ae977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547aff49257b160022a9c3/$FILE/2015datatabook.pdf)
- http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/ca6g7e0000027zc0-att/since2003_tourists.pdf.pdf
- http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_icsFiles/afieldfile/2016/03/30/data15_brief.pdf

討論会プレゼンテーション資料②

THEME2 ARTIFICIAL INTELLIGENCE

THE DEFINITION OF "AI"

- AI stands for **A**rificial **I**ntelligence
- There is no clear definition of AI
→ Basically refers to "the same kind of intelligence as human beings"

WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- Medical care
Make an accurate diagnosis on the basis of the enormous medical books



WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- self-driving
- Tell the difference of the type of vehicle
- Tell whether parking automobiles are trying to start



WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- Pepper (robot developed by SoftBank)
- Equipped with "emotional engine"
→ Read and share the feelings of the people



2045 PROBLEM

- It is expected that the computer will exceed the intelligence of human in 2045
- AI will be responsible for all subsequent invention rather than a human being
- Subsequent progress is unpredictable

- The future that human beings are no longer necessary may come...

- With an understanding of the current situation and the possibility of AI, we must take advantage of it

QUESTION

- How can AI play an important part?
- Is it possible for human to control AI?
- Can AI fit itself to human beings' society?
- What are the things that can't be made by AI?
What can human beings do?